

よく分かる性感染症（7）：ヒト乳頭腫ウイルス

子宮頸がんの危険も

（中国新聞 12面 健康・医療 H19年3月14日水曜）

Q 友人の奥さんが子宮頸がんて手術したのですが、その原因が性感染症だと知ってショックを受けています。（34歳、会社員）

A 子宮ガンには、子宮の入り口部分にガンができる「頸がん」と子宮の奥にガンができる「体がん」の2種類あります。わが国の統計では、早期発見・早期治療が奏功してか、子宮ガンは減ってはいるものの、2003年に5302人の死亡が報告されています。子宮体がんは肥満、妊娠経験がない、糖尿病などが危険因子と言われていますが、子宮頸がんは性感染症との関係が話題になっています。その性感染症とはヒト乳頭腫ウイルス（ヒトパピローマウイルス）を病原体とするものです。HPVは約100種類ほど確認されており、その中で、いずれガンに進行しやすいHPVに感染すると、子宮頸がんになるリスクが高まるのです。

東京都内の高校で、性感染症を心配し保健室に相談に来た女子高校生に、自ら膣内に器具を挿入して検体を採取してもらった結果では、クラミジア陽性率が18%、高リスクHPV陽性率が32%。HPV感染率の方が高いことがわかります。年齢と高リスクHPV検出率との関係では、10歳代、20歳代前半が高いものの、それ以降、陽性率は急激に低くなってい

ます。若年女性では子宮の入り口が未熟であることが理由のようです。体が成熟すると自然に消失するHPVもありますが、高リスクHPVでは子宮頸がんになることがあるのです。

朗報もあります。ワクチンが開発されたのです。子宮頸がんの70%を占めるとされるHPVの16型と18型を予防することができます。日本では現在、治験段階ですが、数年後には接種が可能になるはずです。

米スタンフォード大の調査では、HPVワクチン接種に必要な経費は、HPVに感染したことによって支払われる医療費に比べ、はるかに少ないことも分かっています。

セックスする前の若者たちにワクチンを接種するというのは、保護者には受け入れにくいことかもしれませんが、将来、子宮頸がんになる危険性から解放されるとしたら、とても喜ばしく意義深いことです。

(日本家族協会クリニック所長 北村邦夫)



イラスト・内藤理恵子